

桜並木

題字：岳下 功様

コスモスガーデン桜の里入居者様

鬼は～外
福は～内



2月3日は節分の日。当法人の各事業所でも利用者様と一緒に豆まきを行いました。「鬼は～外 福は～内」の声が響き渡ります。災害や病気などの悪いことはすべて鬼の仕業。鬼に扮したスタッフに向けて、力いっぱい豆をまいて鬼退治！！皆様で力をあわせ邪気を払ったので、今年一年は無病息災まちがいなし。豆まきが終わったら、数年の個数の豆を食べるのが習わしですが、皆様ご高齢なので、100個近い豆を食べるのには無理が・・・。

桜並木

第41号
平成30年3月



医療法人
秋桜会

〒851-2211
長崎市京泊3丁目30番3号
TEL 095-850-6866
FAX 095-850-4888
WEB www.cosmos-garden.com

facebook もご覧ください

公式サイトへ
QRコードで
簡単アクセス



cosmos-garden

皆さんは20年前何をしていましたか？

「成人式」…。思い出せば〇〇年前。♪そんな～時代もあったねと～♪と思わず中島みゆきさんの『時代』を口ずさみ、感慨深くアルバムをめくって皆さんも20年前を思い出してみませんか？

氏名：佐々 和美

所属：コスモスガーデン桜の里

利用者の方とコミュニケーションを自然とできるように一つ一つ丁寧に落ち着いて行動できるようにしたいと思います。与えられた事柄に対して素早く反応できるように理解力と判断力を養い、努力していきたいと思っています。



氏名：山口 光陽

所属：コスモスガーデン桜の里

成人という人生の大きな節目を無事に迎えられて嬉しく思います。これから大人の一員として当たり前の事をしっかりとこなせる芯の強い人間を目指して頑張っていきたいと思っています。

新成人のスタッフです

コスモスガーデン桜の里
デイサービス・コスモス

氏名：内田 美香子

所属：デイサービス・コスモス

利用者様に安心してデイサービスで過ごしていただけるように、まずは自分の体調管理をしっかり行い、利用者様とコミュニケーションをとりながら、一つ一つの仕事を一生懸命頑張っていきたいと思っています。



リハビリテーションで、 元気な町づくり

長崎市在宅支援リハビリセンター

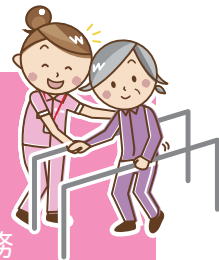
コスモスガーデン桜の里

コスモスガーデン桜の里では、平成29年10月より長崎市在宅支援リハビリセンター推進事業(三重・外海・琴海地区)を受任しております。

この事業では、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の総勢15名の明るく楽しい美男美女の専門職をはじめ、当法人職員みんなで、関係機関と連携して地域リハビリテーションの基盤づくりを図り、皆様の健康と福祉の更なる向上に取り組みます。健康寿命を伸ばす、高齢になっても生活ができる地域社会、要介護状態の軽減・重症化の予防、関係機関のリハビリ意識や知識向上、心の通う共生社会を目指します。

主な業務内容

- (1) かかりつけ医との連携づくりに関する業務
- (2) センター外部のリハビリ専門職との支援体制の構築に関する業務
- (3) 介護従事者等のリハビリテーションに係る知識及び技術向上に資する業務
- (4) 介護従事者のリハビリテーションに係る相談への対応及び同行訪問に関する業務
- (5) 高齢者の自主的な活動への参加促進に関する業務



心が安らぐ住み慣れた地域で長く暮らしていけるように、お一人おひとりの生活に想いを馳せて支援していきます。リハビリのことでわからないこと、体操の仕方を知りたい、仲間づくりをしたい…等々、何でもご相談くださいませ。

お問い合わせ先

コスモスガーデン桜の里

地域連携・企画推進室 下玉利 (しもたまり)

☎ 095-840-1200

✉ shimotamari@cosmos-garden.com

グループホームのある日

どなたでも同じだと思うのですが、目の前で調理されると食欲が湧いてきますよね。目で楽しむだけでなく、香りや音を感じることで、食欲が刺激されるのがその理由なのではないかと思うのですが…。

さて、グループホームコスモス2では入居者の皆様の目の前で餃子を焼いて召し上がっていただきました。ホットプレートを準備し、餃子を並べて焼いていると、「へえ～こがんで焼くとね。」と話をされる入居者様。あら、長い人生経験の中で餃子を焼くのは初めてでしたか？

お店で食べるような『羽根つき餃子』とはなりませんでしたが、それでも皆様「美味しい！」と喜んでくださいました。次回はラーメンも付けて、ラーメン餃子セットにしましょうか？それまでに羽根つき餃子の作り方を習得しておきます！

餃子パーティー

グループホームコスモス2



真っ白な紙がカラフルに

グループホーム新港3階



「大人のための塗り絵」が流行して久しいですね。美しい景色や絵画などの作品をアレンジしたものが多くありますが、いずれも細かな描写になっています。

グループホーム新港では、入居者様に塗り絵を取り組んでいただいています。ただの塗り絵と侮ってはいけません。色を塗るためには、「全体像を把握する」「ふさわしい色を判断する」「手を動かす」といった機能を活用するので、脳全体が活性化されると言われています。また、色を塗る作業を行うためには、椅子に座る必要があります。姿勢を保つために筋肉を動かすので、筋肉補強にもなるかも…

集中して色を塗り、「できた！」と達成感が得られれば、心地よい疲れを感じて夜もグッスリ眠ることができるのかもしれませんが。「そんなことせんでも良く眠れる」とおっしゃる方もよろしければお試しく下さい。完成した作品もせっかくなので、作品展に出展しましょう！

連載小説

「僕の暗い青春」

作者：井下長治

※このお話は、フィクション？です

前回までのあらすじ

ついに最上級生となったボク。山上一派の副番長の澄也に因縁を付けられ屋上に呼びだされた。突然に殴りかかれたので、咄嗟にパンチをかわし、横顔を思いきり殴ってしまった。その様子は瞬く間に学校内に広がり、澄也の仲間達から怒りの眼差しを向けられるようになってしまった。

▼真昼の決闘から 3 週間が過ぎようとしている。山上一派による敵討ちへの憂いもようやく薄らいできていた。昼休みの教室でクラスの男子数名と 10 円弾き（机の一端に若干はみ出して置いた 10 円を鉛筆で弾いて飛ばし、机のもう片方の端に最も近い者が場にある 10 円を総取りするゲーム）に興じていると「長治～長治～」き一坊が息せき切りながら走り込んできた。「なんや！ワイが急におめいて来っけん、弾きすぎて落っちゃえたやっか！」10 円玉が机の端から飛び出してしまったら失格となり 10 円は取られてしまうのである。「ワイ 10 円返せ！」「そげんセコか事ば言いよる場合じゃなかつぞ！」怪訝そうな表情で振り返ったボクにき一坊は話を続けた。「あんさ～オイがさっき職員室の前ば行きよったら山上が中におっとの、チョット見えたっさ。多分感化院から帰ってきとっとバイ。ワイ、用心しとかんばヤバかぞ。」ボクの心臓が音を立てて動き始める。『・・・オイは山上にビビッとるとやろうか？同じ中学生やっか。オイよりも体もこまかやっか。オイが山上にビビるハズなかやっか・・・』自分に言い聞かせる。でも鑑別所帰りの山上はやっぱり怖い。「長治！大丈夫や？ワイ顔の青うなっつとるぞ」「じゃかまし、アイが来んなら来いばヨカやっか。なんちゅうコトあっか。」ボクはまた見栄を張ってしまった。でもき一坊は勿論居合わせた皆が同情の色を浮かべている。▼それからというもの、授業中も仲間とじゃれあっている時も、いつも頭の片隅に上目づかいで威嚇してくる山上の顔があった。その頃から、怒りの眼差しをボクに向けていた澄也の仲間たちが薄笑いの表情を浮かべていることがボクにとっては不気味だった。▼そしてとうとうその時がやって来た。昼休みに弁当を食べ終えくつろいでいるところへ、中学生とは思えないほど大柄な鷹倉がやってきた。「長治、山上の、ワイに話のあっけんチョット来てくれんかてぞ。」ボクはやっぱり見栄っ張りで心臓は早鐘の如く高鳴り、動揺の極みであるのに鷹倉に悟られない様に「ヨカばってん、ドコまでか？」と平然と聞いた。鷹倉の後について行くと 3 階から屋上へ続く階段の下に彼らの仲間が居り、誰もが通れないように見張っていた。ボクを見つけると二人はまた薄笑いを浮かべる。屋上と 3 階の間の踊り場に彼らは居た。山上は 5～6 段上がった所にズボンのポケットに両の手を突っ込んだまま座っている。澄也、ほかの 6 人が踊り場の壁や手すりにもたれていた。全員の視線を一身に浴びて身震いしそうな自分を必死に抑える。「何か用か？」声が震えない様に低く太い音を出した。山上は例の上目づかいでボクを見据えて暫し無言でいたが、時を置いて「ワイ、澄也に勝つて思うとととや？」と言ってきた。「こん前、勝ったやっか！」ボクがそう言うや否や、右横に立っている川口が「偉そうにすんな！」と叫びながらいきなりボクの頬を殴ってきた。いつもおどおどしているような印象しかない川口に殴られた怒りに自分も我を忘れ、「なんばしよととや～」わめき散らかしながら川口を殴り始める。誰かが後ろからボクの腰を思いっきり蹴ってきた。前のめりになったボクを 2 人がかりで引き倒す。後は何人もで、踏んだり蹴ったりのやりたい放題だった。『リンチ』という言葉が脳裏をかすめた時、西部劇に出てくる名犬リンチンが思い浮かんだ。『・・・リンチンがおれば、こんだちば噛み殺せって命令するとなあ～』蹴られ続けながらつくづくそう思った。▼午後のチャイムが鳴り響く。「もう行くぞ」山上のドスの効いた声がした。やっと終わった。ホッとしつつ彼らが行ってしまうのを確認した後もしばらくは動けず横たわっていた。しばらくして教室に戻ると社会科の授業中で、裕先生はボクの顔を見るなり驚き、「なんしたとか？」と尋ねる。「階段で転びました。」と答えると「そうか。気いつけんばなあ」そう言ったっきりですぐに授業の続きを始めた。『・・・たぶん関わりとうなかとやろうな・・・』そう思いながら机に伏せて眠った。